11.感情と文化的知識
楠見　孝　感情概念と認知モデルの構造　土田昭司・竹村和久（編）1996　感情と行動・認知・生理(pp.29-54) 誠信書房　¥2472C＊

対人行動学研究シリーズ　4

土田昭司・竹村和久　編

感情と行動・認知・生理

感情の社会心理学

1996

誠信書房

第2章　感情概念と認知モデルの構造

1　はじめに

本章では、感情に関する言語表現や概念の分析を行ない、感情の理解やコントロールを支える知識構造である「認知モデル」(cognitive model) を明らかにする。さらに、感情に関する知識が、社会や文化のなかでどのように形成され、人びとに共有される知識「文化的モデル」(cultural model) になるかを検討する。ここでは、「認知モデル」とは、文化的モデルを含む、構造化された知識を指し、世界を理解、説明し、行動を方向づける機能をもつと考える (Lakoff 一九八七)。そこで、本章では、感情概念を「認知モデル」の枠組みで検討していく。

(1)　ぼくは、気持ちを彼女に打ち明けたとき、不安で胸がどきどきした。彼女はつきあってくれると言ったから、喜びで天に昇るような気持ちになった。しかし、三カ月後、彼女がぼくの友人とつきあっていると知ったときは、怒りで頭に血が上った。そして、愛を失ったことを悟ったぼくは、悲しみに沈んでいった。

(1)の文のように、私たちは、感情を言語で記述し、説明する。そこでは比喩表現が多く用いられる。こうした感情言語 (emotion language) は、自分や他者の心的状態と外的状況を認知的に評価して、感情にラベルづける役割をもつ (第3章を参照)。すなわち、感情状態を分節化して、確定することになる。さらに、感情言語は、(解釈、記憶などの) 個人内伝達と (会話などの) 個人間伝達を支えている。たとえば、(1)文で描かれた経験は、相手への「愛」であり、その経過は、それぞれ、「不安」「喜び」「怒り」「悲しみ」という感情概念でとらえることができる。

したがって、言語表現にもとづく感情の分析は、感情と認知の問題を包括的に検討する有効な手がかりとなる。もちろん、感情言語は、感情に関する経験や知識をそのまま反映してはいない。しかし、感情言語は、感情処理過程を支える認知モデルの重要な構成要素であると考える。

そこで、本章ではまず第一に、感情言語を、認知心理学の概念研究の観点からとらえる。第二に、感情に関する比喩表現や慣用句を、認知言語学研究の観点からとらえる。第三に、感情に関する規範や文化的モデルとその獲得について、認識人類学や、感情社会学の研究にもとづいて検討する。

2　感情語の構造：認知心理学的アプローチ

A　感情概念の構造

感情語 (emotion word) にもとづいて、感情概念 (emotion concept) を明らかにする研究は、三つに大きく分けることができる。

第一は、感情の基本次元を、感情語や感情表出写真に対する判断や評価データにもとづいて明らかにする研究である。そして、因子分析や多次元尺度解析の結果、感情の次元構造として、多くの研究では、「快－不快」（ポジティブ－ネガティブ）の次元と、「覚醒－睡眠」（活動性）を見いだしている。こうした基本次元は、感情語と表情写真で共通し、異なる言語間でもある程度共通している（たとえば、千葉 一九九三、Russell 一九九一、下川ら 一九九二、Watson et al. 一九八四、吉田 一九八一）。

第二は、感情語彙の構造自体に焦点をあてた研究である。多くの研究があるが、最近では、下川と佐々木（一九九〇）の研究がある。彼らは、感情を表わす言葉を分類語彙表などから、感情を喚起する程度の高い七〇語を選んだ。そして、それらの感情語が、材料の詩に対して当てはまる程度の評定を求め、因子分析の結果、つぎの因子とそれにもとづく意味のクラスを見いだした。これは、感情語の指示する感情的意味やイメージの類似性にもとづくクラスということができる。

第一因子「怒り」（例：怒る、憎い、不満、不快、嫌う、悔しい、恨めしい）
第二因子「喜び」（例：愛情、喜び、好き、満足、楽しい、感謝、うらやむ）
第三因子「悲しみ」（例：寂しい、悲しい、哀れみ、わびしい、苦しい、心配）
第四因子「驚き」（例：驚く、たまげる、おっかない、面白い、おかしい）

一方、オートニー（Ortony, A.）らは、従来の研究とは異なり、感情語の指示する心理的状況

(psychological conditions) にもとづいて、感情語の語彙構造を明らかにした。彼らは、五六四の感情語を、外的条件と内的条件（身体的状態や心的状態）に分類して、さらに心的状態を「感情焦点、認知焦点」に分けて、つぎのような感情語彙のクラスを見いだしている（Clore et al. 一九八七）。

外的条件　（例：孤独な、あきらめた、良い、悪い、奇妙な、罪悪感、魅力的な）
身体的状態（例：快適な、眠い、疲れた、めまいのする、熱のある、リフレッシュ）
情緒的条件（例：怒り、幸福な、悲しい、愛、後悔、嫌悪、憎しみ、恐れ、恥）
認知的条件（例：確実な、防衛的な、感動した、かわいそうな、好奇心のある）

第三は、感情のカテゴリ構造を、ロッシュ（Rosch, E.）の自然カテゴリ（動物、家具など）の理論にもとづいて検討する研究である。そして、感情概念は、自然カテゴリと同じ構造的特徴をもつことを明らかにした。すなわち、垂直構造としては、階層構造や基礎水準、水平構造としては、典型性、ファジィ構造、家族的類似性があった（Shaver et al. 一九八七）。

たとえば、日常生活における認知活動では、基礎水準（basic level）概念が頻繁に利用される。すなわち、感情語（恐れ、悲しみ、怒り、喜び、驚き、嫌悪、愛など）の多くは、感情の基礎水準概念と対応する（Russell 一九九一）。これらの感情語は、認知、命名、伝達、記憶などがもっとも容易な水準である。また子どもの獲得時期も早い。これらの基礎水準概念の下位概念には、たとえば、「怒り」には「激怒」「苛立ち」などがある。こうした概念間の階層関係は、命題形式で知識表現できる。

なお、類似の心理学用語として、「基本感情」(basic emotion) がある。基本感情は、概念として基礎水準にあるだけではなく、その生理学的・進化論的基盤、心理学的基盤との対応が重要となる(第1章を参照)。

一方、感情概念の水平構造は、カテゴリにおける典型性のグレイド構造である。すなわち、典型的な概念から、非典型的概念、他のカテゴリとの境界概念まである。たとえば、「怒り」カテゴリにおいて、「立腹」は典型的な概念であるが、「悲憤」は、「悲しみ」との境界に近い概念である。

また、文化的普遍性が成立するのは、基礎水準の感情や、典型的な感情である。一方、下位水準あるいは周辺的な感情「甘え」「義理」「人情」などは文化的特殊性があると考えられる (Russell 一九九一)。

B　感情・感覚的意味の構造

(2)　明るい／暗い気分 (視覚形容語)
(3)　静かな気分 (聴覚形容語)
(4)　甘い気分 (味覚形容語)
(5)　重い／軽い気分 (触覚形容語)

(2)-(5)で示したように、感情語には、五感 (視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚) における形容語が多く含まれている。感覚を表わす語は、その感覚が引き起こす感情に転用して使われることが多い。すなわち、感覚形容語の転用の方向性には、「触覚」→「味覚→嗅覚」→「視覚→聴覚」→「気分」「性格特性語」といった方向性がある。たとえば、触覚の「冷たい-熱い」(cool-hot) は、気分 (感情) や性格の「安定性-不安定性」に転用できる。このように、五感の形容語は、感情語のソースになっている。こうした感覚形容語の感情語への転用を支えているのは、五感それぞれの感覚形容語の意味空間と気分の意味空間が「快-不快」「強-弱 (覚醒-睡眠)」の次元で同型性をもっているからである。すなわち、「甘い気分」は、味覚の「甘さ」そのものというよりも、「快」で「やや弱い」という次元上の意味で解釈される (楠見 一九八八a、b)。

(2)-(5)のような、ある感覚モダリティの感覚形容語で、他の感覚モダリティの経験を形容する表現は、共感覚的比喩と呼ぶことができる。こうした共感覚を、対象の情緒的意味を明らかにする方法に適用したものが、オズグッド (Osgood, C. D.) のSD法 (semantic differential) 法である。すなわち、対象を感覚形容語の対 (明るい-暗い、強い-弱いなど) で評定し、因子分析によって、三因子、「評価」(例：快-不快)「力量性」(例：強い-弱い)、「活動性」(例：速い-遅い) を見いだした。これらの因子は、評定対象や尺度、文化、言語によって多少の差異はあるが、比較的安定している。また、評価因子と力量性因子は、2-Aで述べた感情の次元「快-不快」「強-弱」と対応している。こうしたSD法で明らかにした意味空間を、オズグッドは情緒的意味空間 (affective meaning space) と呼んだ。日本でも、SD法を用いて、感情語の因子分析的研究が行なわれてきた (吉田 一九八一)。

そのほか、日本語には、感覚と感情を表現する形容語として、「おどおど」「いらいら」などの擬態語（擬情語、音喩、オノマトペア）が数多くある。山内（一九七八）は、感情を表現する四二の擬態語を因子分析によって、以下の通り分類した。

第1因子「不安」「恐れ」（例：ひやひや、どぎまぎ、おどおど、どきどき）
第2因子「喜び」「幸福」（例：うっとり、うきうき、ほっ、わくわく）
第3因子「驚き」（例：ひやっ、ぎょっ、どきっ、びくっ、がーん）
第4因子「悲しみ」（例：しょぼん、がっくり、くよくよ、がくっ）
第5因子「怒り」（例：むらむら、いらいら、つんつん、かっか）

これらは、心拍、息などの身体的変化の音響を言語音に移した擬声語に近い擬態語（例：どきどき、どきっ、ほっと）、心理状態を言語音によって象徴的に表現した語音象徴に近い擬態語（例：うきうき、むらむら、かっか）に分けることができると考える。

以上述べてきた研究は、感情語に対する、典型性評定、事例産出、特徴抽出、類似性判断、SD法などにもとづいて、概念構造を計量的に明らかにするものであった。しかし、文脈から孤立した感情語だけでは、出来事や具体的な経験を特定できない。感情語にもとづく構造は、状況や文脈を抜きにした、単語レベルの静的な分析であるという批判がある（Hoffman et al. 一九九一）。

したがって、感情語を分析するためには、感情を引き起こす出来事、状況などの文脈や、心のなかの動きや生理的、身体的変化の表現も含めて分析する必要がある。そこで、3では、状況や文脈をある程度特定できるように、少なくとも語句レベルの言語表現、動詞を含む表現を扱う。さらに、出来事、目標や感情状態の時系列的変化を表現したシナリオやスクリプトも含めて検討する。

3　感情の言語表現の構造：認知言語学的アプローチ

認知言語学的方法は、感情に関する言語表現、慣用句、比喩を分析することによって、感情概念を支える認知モデルを明らかにしてきた（Kövecses 一九九〇、Lakoff 一九八七）。

(1)文の例であげたように、自分や他者の、感情の生起過程や状態の変化を記述・説明する場合には、比喩表現がしばしば用いられる（例：頭に血が上る。胸が高鳴る）。

たとえば、オートニーらは、大学生に対する構造化された面接で、「怒り」「悲しみ」などの感情に関する言語表現を収集した（Fainsilber & Ortony 一九八七）。ここで、比喩表現が多く用いられるのは、①行動よりも心的状態を表現するとき、②強い感情を表現するとき――であった。感情の内的状態を、字義通りに表現しようとしても、充分な語彙がないため、難しい。その点、比喩は簡潔で、ビビッドな表現ができるという、コミュニケーション機能をもつ。

また、(1)文の例にもあるように、感情の比喩表現の多くは、身体語彙にもとづいた慣用句表現である。従来の言語学的研究では、感情語の成分、特性を分析したり、中心的意味（core meaning）を

明らかにすることをめざしてきた。それに対して、認知言語学では、慣用的な言語表現に焦点をあてて、それがどのような概念構造に支えられているのかを明らかにする。たとえば、ケヴェクセス（Kövecses 一九九〇）は、感情概念が、比喩の体系、概念間の関係、認知モデルなどで構造化されている点を強調している。

さらに、認知言語学的研究は、感情概念の全体構造よりも、個々の感情に焦点をあてて、言語事例を収集し、その概念構造を詳細に検討する点に特徴がある。そこで、ここでは、感情に関する身体語彙と比喩表現を分析対象にする。「愛」（love）と「怒り」（anger）を例に多く用いるが、その理由は、感情における典型性評定の結果が、それぞれ一位、二位と高いことと、先行研究が豊富なことによる（Kövecses 一九九〇、Lakoff 一九八七、Shaver et al. 一九八七）。

A　感情の比喩表現を支える身体語彙

感情に関する言語表現の多くは、身体部位に関する語彙（頭、目、胸、腹など）にもとづいている。図2-1は、『広辞苑（第4版）』（岩波書店）、『広辞林（新版）』（三省堂）、『福武国語辞典（初版）』（福武書店）、『慣用句大事典』（東京堂）、『人間装飾語辞典』（PHP研究所）の用例と中村、宮地、星野の先行研究にもとづいて、用例を収集したものである（星野 一九七六、宮地 一九八二、中村 一九八五）。感情の身体語彙表現の用例数は、身体部位によって差異がある。用例数は、顔（例：目、鼻、口）がもっとも多く、つぎに内蔵（例：胸、腹、肝）で、姿勢（例：手、足、腰）は少ない。その理

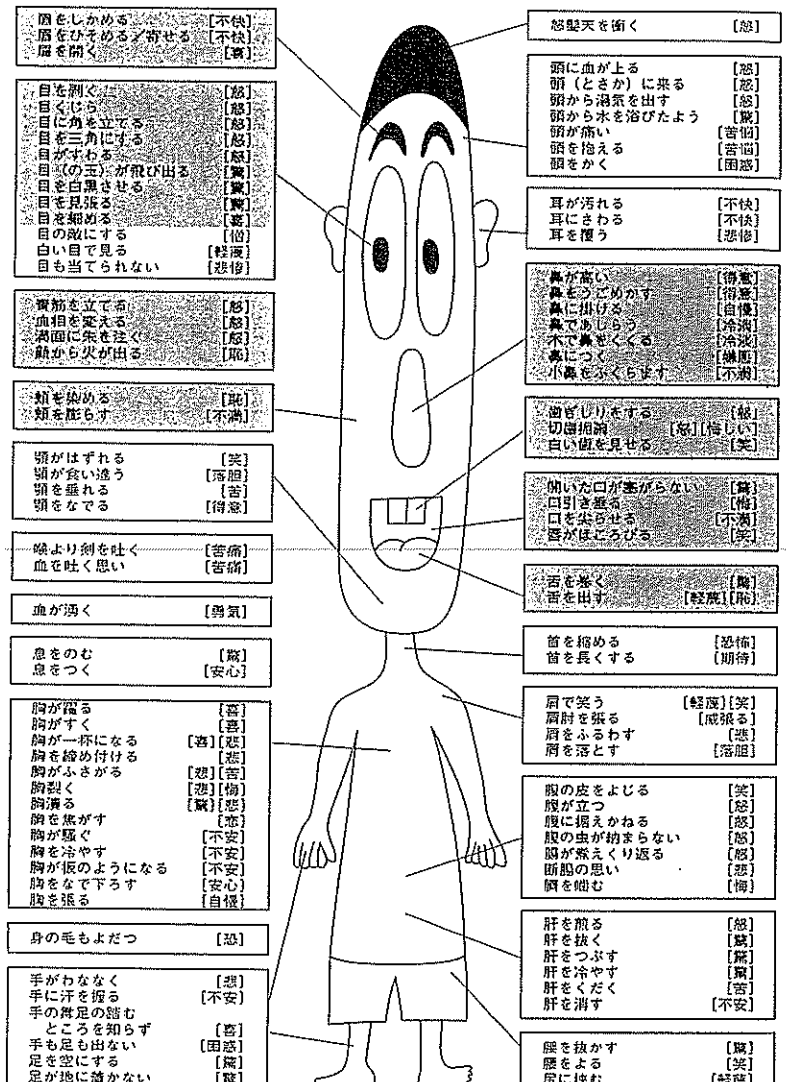

図 2-1　身体語彙にもとづく感情表現（身体部位の大きさは用例数に対応する。網掛けは 表情，生理的変化，無印は 姿勢とその他 を示す）

由は、顔の表情の変化が、感情の微妙な変化をもっとも表現しやすく、認知しやすいからである。それに比べると、姿勢や身体部位の変化は、感情の強度がある程度大きく、急激な変化や、持続的状態でないと認知しにくい。一方、自分自身の内的、生理的変化は、直接的で敏感に認知できるが、他者のそれは認知できない。そこで、この二つに分けて、身体語彙にもとづく感情言語を見ていく。

a　表情や身体部位の変化の記述にもとづく感情表現

感情は、第一に、顔面部位（額、目、頬など）の筋肉や色の変化で表現できる。もっとも多いのは、「目」である。目の形態は、注目されやすく、また表情が顕著に現れる。たとえば、「目を見張る」（驚き）、「細くする」（喜び）、「角を立てる」（怒り）、「白い目で見る」（軽蔑）。また、「眉」に関しては「眉をしかめる／ひそめる／寄せる」（不快）、「眉を開く」（喜び）がある。こうした目と眉に関する言語表現と感情表出の関係は、コンピュータ・グラフィックの表情と感情をマッチングさせる実験結果と対応している。すなわち、①目・眉の傾斜度と「快-不快」、②目・眉・口の湾曲（開示）度と「覚醒度・注意活動」が、それぞれ対応する（Yamada 一九九三）。

第二に、感情にともなう身体部位の反応を描写することによって、それを引き起こす感情を表現できる。身体部位の変化には、「手がわななく」（悲しみ）、「身の毛もよだつ」（恐怖）などがある。姿勢の変化には、「肩を落とす」（落胆）、「胸を張る」（自慢）、「腹の皮をよじる」（笑い）、「腰を抜かす」（驚き）、「足を空にする」（驚き）がある。

これらの表現の起源は、現実の表情や身体部位、姿勢の変化を字義通りに描写したものである。しかし、実際には、身体変化が現れていなくても比喩的に使われている。すなわち、これらは、換喩表現として、①表情、身体・姿勢（部分）の記述で、感情（全体）を示したり（例：胸を張る→自慢）、②表情、身体・姿勢の変化（結果）で、感情（原因）を示す（例：腰を抜かす→驚く）――の二通りがある（楠見 一九九二）。こうした表現を支える認知モデルを「換喩モデル」（metonymy model）という（Lakoff 一九八七）。

b　身体の内的・生理的変化にもとづく感情表現

感情の働く場や源として、内蔵（胸、腹、肝など）をとらえ、その変化で感情を表現できる。「胸」に関する用例がもっとも多い理由は、感情喚起による心拍変化が顕著に検出できるためである。したがって、昔から「心」の座としてとらえられてきた。したがって、さまざまな種類の感情表現に使われている。ここで、「胸」は「心の容器」があり、そのなかの感情という「液体」が「騒ぐ」（不安）、「あふれる」（喜び）、「熱くなる」（感激）という表現がされる。また、感情を「固体」ととらえて、「焦がす」（恋）、「裂く」（悲しみ）という表現もある。

「腹」には、癇癪を起こす「虫」がいて「腹の虫がおさまらない」「腹に据えかねる」「腹がたつ」といった「怒り」の表現が多い。

「肝」は、「抜く／つぶす／冷やす」などの「驚き」の表現が多い。「肝を煎る」（怒り）、「肝をくだく」（苦しみ）、「肝を消す」（不安）などがある。これらの感情は、「胸」「腹」で表現した感情

状態よりも、まれでネガティブな強い感情状態を示すことが多い。

また、「頭」に関わる「頭に血が上る」「頭に来る」といった表現は、「怒り」にともなう血圧の上昇に対応している。

こうした感情による内的状態の変化は、直接見ることができない。また、描写するための固有の語彙は少ない。そこで、図2-2のように、感情の言語表現においては、身体感覚領域の変化（例：体温や血圧の上昇）を物理領域の変化（例：温度や圧力の上昇）で説明する比喩・類推が用いられている。このように、ある基底領域から目標領域に語彙を転用するような認知モデルを「隠喩モデル」（metaphor model）という（Lakoff 一九八七）。さらに、「隠喩モデル」の基底領域において、つぎに述べるイメージスキーマが、比喩表現の一貫性、体系性を支えている。

B　感情の比喩表現を支えるイメージスキーマ・モデル

感情に関する比喩表現は、ばらばらのものではなく、一貫性をもっている。それは、アナログなイメージが、認知モデルとして、感情を示す動詞や形容詞、比喩表現に構造を与えているからである。イメージスキーマは、具体的な視覚的イメージとは異なる。生理的、身体的、知覚的な経験にもとづく力動的パタンを抽象化した構造である（Lakoff 一九八七、Johnson 一九八七）。

こうした考え方にもとづいて、認知言語学者レイコフ（Lakoff, G.）らは、慣用的比喩を分析することによって、「怒り」感情に関するイメージスキーマを明らかにしている（Kövecses 一九九〇、

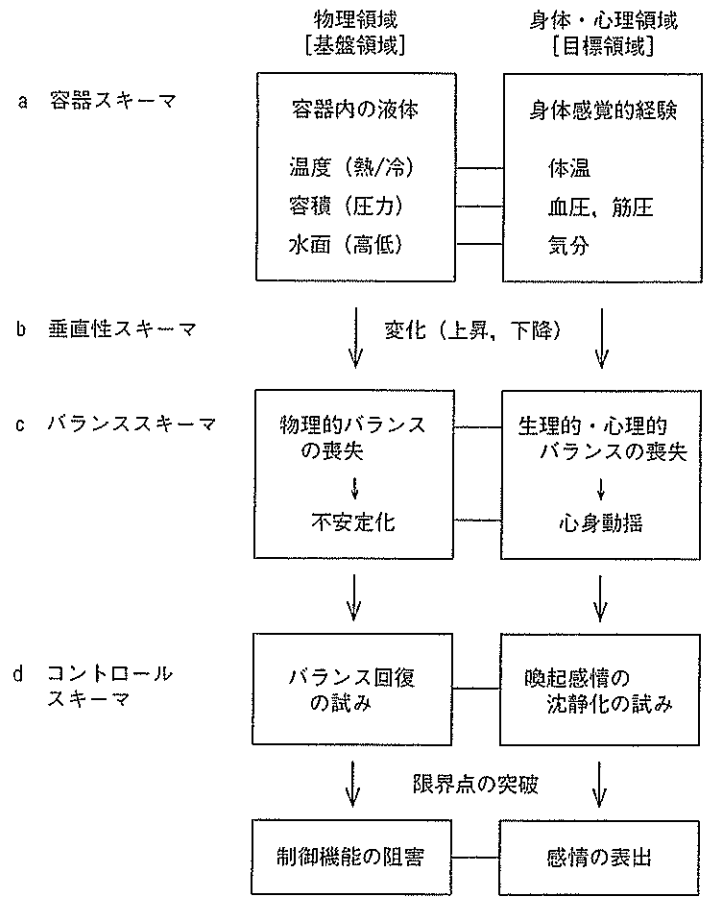

図 2-2　感情の言語表現を支えるイメージスキーマ・モデルと隠喩モデル

Lakoff 一九八七、Lakoff & Kövecses 一九八七)。そこで、日本語における「怒り」の比喩の例で考えてみる。図2-1に示したように、「怒り」による内的、生理的変化にもとづく感情表現は、多様である。しかし、その表現を支えているイメージスキーマは、図2-2に示すように、四つに大きく分けて考えることにする。

a　容器(container)スキーマ(容器比喩)

心を「容器」と考え、感情をその中に入った「液体」と考えるスキーマである。「怒り」は、心という容器中の液体温度が上昇し「熱くなり」「怒りに燃え」「煮えくり返り」「ぷんぷん」「ぷりぷり」「かっと」「かんかん」になる。これらは、熱によって圧力が増した状態と想定できる。

b　垂直性スキーマ(方位比喩)

感情の変化を、空間的な上昇下降の変化方向で構造化するスキーマである。

「怒り」は、上昇である。「怒り」によって、「感情容器」内の「液体」の水位が上昇し、「怒りがわき上がる(噴き上げる/こみ上げる/燃え上がる)」「憤る」「憤激する」「憤激、憤怒、憤然」「頭(とさか)にくる」「逆上する」「いきり立つ」「(殺)気立つ」「いらだつ」。これらは、血圧の上昇によって「頭に血が上る」身体的なイメージと対応している。なお、そのほか、上昇イメージには、「喜び」「希望」、一方、下降イメージには、「悲しみ」「絶望」などがある(楠見 一九九三)。

c　バランススキーマ

ふだんの心の状態は、バランスを保った状態である。そして、感情が喚起した状態は、通常の状態からの逸脱し、生理的・心理的バランスを失った状態と考えられる。すなわち、心身の動揺は、bで述べたような「心の容器における感情の液体」の温度や圧力が上昇による物理的バランスの喪失として、記述、説明される。

d　コントロールスキーマ

感情の喚起によって、心身が動揺すると、感情を沈静化させようと、主体は努力する。たとえば、「怒り」はコントロールされる対象であり、「怒りを抑える/静める」必要がある。しかし、「怒り」が蓄積し、コントロールできる限界点を越えたときには、コントロール機構は正常に働かなくなり、感情が表出される。これが「怒りが爆発する」「癇癪玉が破裂する」「かちっとくる」ときである。これは、容器内の液体の温度や圧力が上昇し、コントロールできる限界点を越えて、爆発することと構造的に対応する。

以上のイメージスキーマは、関連する認知モデルを生み出す。液体で満たされたタンク(容器)とそれをつなぐパイプ、水圧によるエネルギーからなる水力学モデルである(例:心の中にもやもやがたまる→怒りが爆発する、頭に血が上る)。これは、(水力)機械モデルということもできる。このように、私たちは、身体-心理的世界とその変化(脈拍、心拍、体温、血圧の上昇)を表現するために、物理的モデルを用いて、構造的な記述や説明をしている。フロイト(Freud, S.)の精神分析

理論も心的エネルギーの水力学モデルを用いている。

さらに、感情を引き起こす典型的な状況や、それによって起こる心理的、身体的変化は、「プロトタイプ・シナリオ」の形で構造化されている（Lakoff 一九八七）。たとえば、「怒り」に関しては、「欲求の阻止→怒り感情の喚起→バランスの喪失→コントロールの試み→限界点の突破→表出」といった時系列からなるスクリプト構造がある。図2-2の右側に示したように、イメージスキーマはその構成要素になっている。こうしたプロトタイプ・シナリオは、自他の感情に関する原因の推論、評価、表出のコントロールにおいて働いている。

また、感情の比喩表現が、異文化間で共通する。たとえば、怒りによって、「熱くなる」（hot）、「破裂する／切れる」（burst a blood vessel）など数多くの比喩表現が、日本語と英語で共通している（Lakoff 一九八七）。その理由は、イメージスキーマ・モデルが、広く人びとに共有されているためと考えられる。これは、イメージスキーマが、感情に関するヒトに普遍的な生理-身体的経験に依拠しているためである。

しかし、感情に関するイメージスキーマ・モデルやプロトタイプ・シナリオは、感情の生理学理論とは、完全には対応しない。むしろ、感情のプロセスに関する「通俗理論」（folk theory）、「心の理論」（theory of mind）である（D'Andrade 一九八七）。ここには、各感情がどのような状況において、生起し、また、コントロールすべきものととらえるかという社会・文化的知識が関与している。すなわち、ヒトという種に普遍的な生理学的な面と、文化に依存した感情表示規則（ある場面である感情をどのように表出すべきか）の両方を反映している（たとえば、中村 一九九三）。こうした社会・文化的側面については、つぎの4で述べる。

4　感情の文化的モデル：認識人類学的アプローチ

認識人類学者や感情社会学者は、会話分析や面接法にもとづいて、日常言語における感情概念を分析した（D'Andrade & Strauss 一九九二、岡原 一九八七）。こうしたアプローチは、（語彙知識や百科事典的知識以上の）規範、価値、信念、常識などを明らかにできる。

たとえば、「怒りを抑える」「悲しみをこらえる」という表現は、怒りを相手にぶつけたり、泣きわめいたりすることは、大人げないという社会・文化的規範にもとづく、感情コントロールに関する言語表現である。

子どもは、大人になるまでに、こうした社会・文化的に共有された規範や知識を獲得する必要がある。このようにある社会集団の成員に共有されたスキーマ、認知的モデルを「文化的モデル」という。文化的モデルは、単なる知識表象ではなく、人が感情を解釈したり、コントロールする枠組みとして働く（D'Andrade 一九八七）。

3-Bで述べた感情のプロトタイプ・シナリオは、感情エピソードについての経験、期待、規範がスクリプト（日常的出来事に関する時系列的知識）として、構造化したものといえる。しかし、スクリプトを提唱したシャンク（Schank, R. C.）は、社会・文化的な位置づけはしていなかった。こ

こでは、文化的モデルの構造と獲得を検討していく。

A　感情概念の文化的モデル：「愛」の概念構造

感情の文化的モデルを明らかにするために、ここでは、社会・文化的影響を大きく受けていると考えられる「愛」の概念を検討する（楠見 一九九五）。

「愛」（love）の概念に関しては、2-Aで述べた認知心理学の概念研究にもとづいて、典型性構造が明らかになっている。カナダの大学生八四人の事例列挙法データでは、第一位が「友情」（出現率六一％）で、二位以下「性的」（三〇％）、「親の愛」（二七％）、「兄弟愛」（二六％）などが、8位の「恋愛」（二三％）より上位にきている（Fehr & Russell 一九九一）。一方、日本の大学生では、「愛」に対する連想頻度の高い順に、「恋愛」（六八％）、「家族の愛」（三九％）が多く、「結婚」（一九％）が続く（楠見 一九九四）。これらは、「愛」の事例としての典型性構造を反映する。たとえば、カナダの大学生の「愛」の概念では、「友情」が典型的であるが、日本の大学生では「恋愛」が典型的である。これらを比べると、カナダ、日本とも「宗教的な愛」や「人類愛」は、非典型的で、周辺的な「愛」のタイプと考えられる。

さらに、楠見は、概念地図法により、「愛」の概念構造を検討している。大学生一一四名に、図2-3のように、概念「愛」を白紙中央におき、つぎに、「愛」に対する連想語をリンクでつないで、ネットワーク状の概念構造を描かせた（リンク数、連想語数には制約はなかった）。これは、概念構造

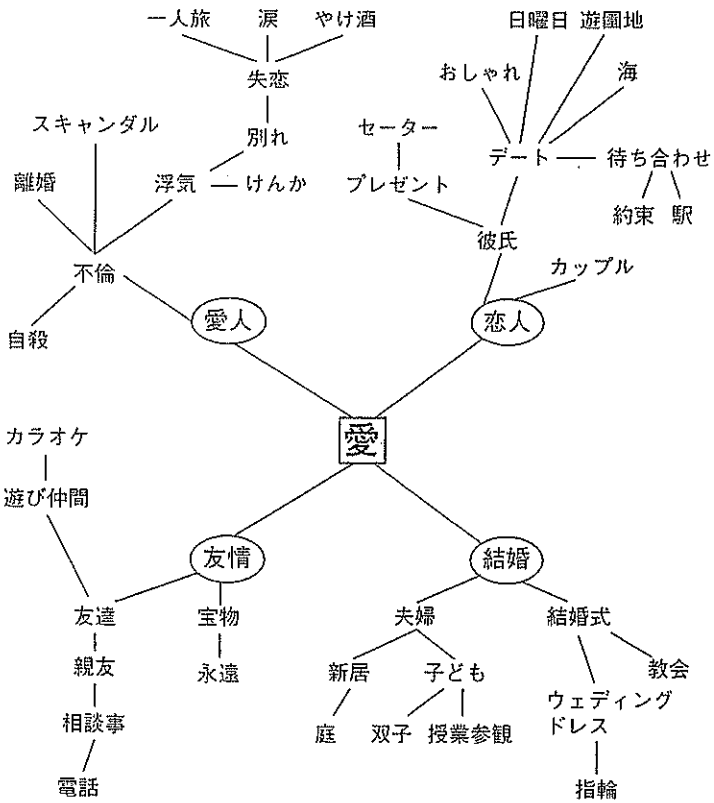

図 2-3 「愛」概念の放射状構造の例（ある大学生女子が作成した概念ネットワーク）〔楠見 1994〕

を反映できる連想法である（楠見 一九九四）。

結果は、「愛」の連想構造は、図2-3のような放射状構造をもっている。すなわち、「愛」に対して、「友情」「恋人（恋愛）」「結婚」「愛人（不倫）」といった中心的下位カテゴリにリンクが放射状に伸びている。さらに、これらの下位カテゴリを中核として、各事例が結びついている。また、「恋愛」のノードには、典型的なシーン「デート」や登場人物「恋人」、場所「遊園地」、小道具「プレゼント」などが結びつき、スクリプト的表現になっている。

さらに、楠見は、「愛」の比喩表現を支える概念構造を、比喩を用いた自由記述で、検討している（楠見 一九九二）。その結果、比喩は、「愛」のような抽象的な主題に構造を与えること（例：愛は建物のようだ）、また、複数の比喩は、下位カテゴリを顕在化させたり（例：海のような人類愛と檻のような家族愛）、因果関係や時間的変化（例：湖のような美しい愛が、時とともに濁った沼のような愛に変わる）を表現することを明らかにした。レイコフとジョンソンは、「愛」というのは明確な輪郭のある構造をもった概念ではなく、比喩を通して構造が与えられ、理解できる概念だとしている。彼らは、「愛」に関する比喩のさまざまな用例を取り上げ、比喩が概念の構造に一貫性を与えていることを示している（Lakoff & Johnson 一九八〇）。

B　感情の規範構造：思春期少女の「恋愛」

感情の認知モデルは、単なる知識表象ではなく、感情解釈の枠組みとして働き、行動を制約し、

方向づける役割をもっている。こうした感情規範（feeling norm）は、社会・文化的に形成された共有知識や常識である「文化的モデル」の重要な部分を占める。そして、感情に関する行動の適切性規準として働き、さらに行動を動機づける力（motivational force）をもっている（D'Andrade & Strauss 一九九二）。

ここでは、思春期以降の男女にとって大きな意味をもつ、恋愛感情の規範を検討する。社会学者サイモン（Simon, R. W.）らは、恋愛に関する規範を、アメリカの女子中学生に対する会話観察と深層グループ面接によって明らかにした。たとえば、昼休み中の雑談や、討論、噂話、時には、対決や、冗談において、どのような恋愛行動が、適切、あるいは不適切として語られているかを検討した。そして、つぎのような規範を見いだした（Simon et al. 一九九二）。

(1) 恋愛関係は重要であるが、生活のすべてではない（男子に夢中の者は非難される）。
(2) 恋愛感情は、異性に対してもつべきである（同性愛は噂になったり、からかわれる）。
(3) 恋愛感情を、すでに他の人とつきあっている人に対してはもつべきではない（先取権があり、その違反者は非難される）。
(4) 恋愛感情は、一人に対してだけもつべきである（複数の相手とつきあう者は非難される。違反しないように、「恋愛」感情を「友情」に変えることもある）。
(5) 人はいつも恋しているべきである（この規範は「恋愛」の理解の重要な部分を占める。ただし、この規範への違反は他者には影響しない）。

こうした恋愛規範は、仲良しグループ内で成立している。たとえば、規範(3)に反する行動は強く非難される。規範はグループ内の秩序を維持し、対立と不快な感情を避けるためにある。

こうした恋愛に関する社会的規範は、普遍的な知識というよりは、社会・文化的に規定された知識である。したがって、社会・文化的な差異がある。たとえば、日本の大学生では、規範(3)を守るべきだと考える者は二割弱である（楠見 一九九五）。また、テレビドラマなどで描かれる恋愛においても、規範(3)、(4)への違反をテーマとするものが多く、（困難を乗り越えて、愛を成就する）ポジティブなモデルとして描かれている。このようにマス・メディアなどから、感情に関する文化的モデルがどのように学習されるかについて、つぎに述べる。

C　感情概念の社会・文化的学習

感情に関する概念、とりわけ文化的モデルの中核をなすプロトタイプ・シナリオ、スクリプトや規範は、社会化、文化的学習によって獲得される。その点で、自然概念の学習とは異なり、情報の利用可能性が社会的に制限されていることがある（Strauss & Quinn 一九九一）。

たとえば、「恋愛」に関する情報は、友人からのコミュニケーションやメディア（漫画、テレビ、本など）から獲得している。しかし、「恋愛」に関する文化的情報は、環境に遍在していても、受け取る子どもの年齢によっては、利用できないこともある（また、ある年齢までは、そうした情報に接触することを禁止されることもある）。

ところで、日本の大学生には、「恋愛感情が湧かなくては結婚できない」という態度が、7割弱の人に共有されている（楠見 一九九五）。また、4-Aで紹介した連想ネットワークでも「恋愛→結婚」のリンクは頻出していた。しかし、こうした「恋愛→結婚」のリンクは、子どもの談話には、ほとんど出現しない（Strauss & Quinn 一九九一）。その理由は以下の通りである。「恋愛→結婚」のリンクは、子どもの接する物語やテレビ、映画などにでてくるが、子どもは、愛に関する興味や動機づけをもたないため、結婚と結びつけることができない。また、思春期に達しない子どもでは、恋愛を直接経験したこともない。したがって、大人と同じ「恋愛→結婚」の概念の結びつきを獲得できないのである。

一方、青年期の男女は、恋愛に関するマス・コミュニケーションやパーソナル・コミュニケーションによる豊富な文化的情報に取り囲まれ、恋愛感情を動機づけられている。したがって、「恋愛」に対する高い価値づけや、「いつも恋愛していなければならない」規範(5)が成立しているのである。さらに、恋愛に関する社会・文化的知識は、①（身近な人の）観察からの解釈、推論、演繹、②（友人関係の形成過程からの）類推、③自分の経験とそこからの帰納、などによっても成立する（Strauss & Quinn 一九九一）。

5　まとめ：感情の認知モデル

本章では、感情概念とその構造を支える認知モデルを、感情言語（感情語、慣用句、比喩表現など）にもとづいて検討してきた。そして、感情の認知モデルの構造を、三つのアプローチから検討し、つぎの種類の認知モデルを明らかにした。

(1) 認知心理学の感情カテゴリ研究：命題モデル
(2) 認知言語学の感情言語研究：イメージスキーマ・モデル、隠喩モデル、換喩モデル
(3) 認識人類学や感情社会学の感情研究：文化的モデル

これらの感情の認知モデルが、感情概念の全体的構造を支えている。そして、日常生活において、自他の感情を理解したり、言語表現したり、説明したり、行動をコントロールしたり、予測したりする働きをもつのである。

（付記）本稿の草稿に対して中村真氏（宇都宮大学）から貴重なご教示をいただきましたことを感謝します。また、本稿の研究の一部は、平成四年度文部省科学研究費補助金奨励研究（A）（課題番号04710038）の援助を一部受けました。

第3章　認知的感情理論——感情生起に関わる認知評価次元について

Harré, R. (Ed.), *The social construction of emotions*. Blackwell, 1986.

Izard, C. E., *The face of emotion*. Appleton-Century-Crofts, 1971.

Izard, C. E., *The psychology of emotions*. Plenum Press, 1991.

Izard, C. E., Four systems for emotion activation: Cognitive and noncognitive processes. *Psychological Review*, 100, 1993, 68-90.

James, W., *The principles of psychology*. Holt, 1890.

Johnson-Laird, P. N. & Oatley, K., Basic emotions, rationality, and folk theory. *Cognition & Emotion*, 6, 1992, 201-224.

Klinnert, M. D., Campos, J. J., Sorce, J. F., Emde, R. N. & Svejda, M., Emotions as behavior regulators: Social referencing in infancy. In R. Plutchik & H. Kellerman (Eds.), *Emotion: Theory, research, and experience*, Vol. 2. *Emotions in early development*. Academic Press. 1983, 57-86.

Lazarus, R. S., *Emotion and Adaptation*. Oxford University Press, 1991.

LeDoux, J. E., Cognitive-emotional interactions in the brain. *Cognition & Emotion*, 3, 1989, 267-289.

Levenson, R. W., Ekman, P., Heider, K. & Friesen, W. V., Emotion and autonomic nervous system activity in the Minangkabau of West Sumatora. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 1992, 972-988.

Levy, R. I., Emotion, knowing, and culture. In R. A. Shweder & R. A. Levine (Eds.), *Culture theory: Essays on mind, self and emotion*. Cambridge University Press, 1984.

Lutz, C. & White, G. M., The anthropology of emotions. *Annual Review of Anthropology*, 15, 1986, 405-436.

MacLean, P. D., *The triune brain in evolution: Role in paleocerebral functions*. Plenum, 1990.

Mandler, G., *Mind and body: Psychology of emotions and stress*. Norton, 1984.

McDougall, W., *An introduction to social psychology*. Luce, 1926.

Mesquita, B. & Frijda, N. H., Cultural variation in emotions: A review. *Psychological Bulletin*, 112, 1992, 179-204.

Oatley, K., *Best laid schemes: The psychology of emotions*. Cambridge University Press, 1992.

Ortony, A. & Turner, T. J., What's basic about basic emotions? *Psychological Review*, 97, 1990, 315-331.

Panksepp, J., Toward a general psychobiological theory of emotions. *The Behavioral and Brain Sciences*, 5, 1982, 407-467.

Plutchik, R., A general psychoevolutionary theory of emotion. In R. Plutchik & H. Kellerman (Eds.), *Emotion: Theory, research, and experience*, Vol. 1. *Theories of emotion*. Academic. 1980, 3-31.

Plutchik, R., Evolutionary bases of empathy to justice and moral. In N. Eisenberg & J. Strayer (Eds.), *Empathy and its development*. Cambridge University Press, 1987.

Rosaldo, M. Z., *Knowledge and passion: Ilongot notions of self and social life*. Cambridge University Press, 1980.

Rosch, E. H., Principles of categorization. In E. H. Rosch & B. B. Lloyd (Eds.), *Cognition and categorization*. Erlbaum. 1978, 27-48.

Scherer, K. R., What does facial expression express? In K. Strongman (Ed.), *International review of studies on emotion*, Vol. 2. Wiley. 1992, 139-165.

Smith, C. A., Dimensions of appraisal and physiological response in emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 1989, 339-353.

Stein, N. L. & Oatley, K., Basic emotions: Theory and measurement. *Cognition & Emotion*, 6, 1992, 161-168.

Stein, N. L. & Trabasso, T., The organization of emotional experience: Creating links among emotion, thinking, language, and intentional action. *Cognition & Emotion*, 6, 1992, 225-244.

戸田正直『感情――人を動かしてやまぬ理性スカリスマ』東京大学出版会、一九九二。

Tomkins, S. S., Affect theory. In K. R. Scherer & P. Ekman (Eds.), *Approaches to emotion*. Erlbaum, 1984.

Turner, T. J. & Ortony, A., Basic emotions: Can conflicting criteria converge? *Psychological Review*, 99, 1992, 566-571.

Watson, J. B., *Behaviorism*. University of Chicago Press, 1930.

Weiner, B. & Graham, S., An attributional approach to emotional development. In C. E. Izard, J. Kagan & R. B. Zajonc (Eds.), *Emotions, cognition, and behavior*. Cambridge University Press, 1984.

第2章

千葉浩彦「感情の変容と表情」吉三左記子、益谷真、中村真編『顔と心――顔の心理学入門』サイエンス社、一九九三。

Clore, G. L., Ortony, A. & Foss, M. A., The psychological foundations of the affective lexicon. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1987, 751-766.

D'Andrade, R., A folk model of the mind. In D.

Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought*. Cambridge University Press, 1987.

D'Andrade, R. G. & Strauss, C., *Human motives and cultural models*. Cambridge University Press, 1992.

Fainsilber, L. & Ortony, A., Metaphorical uses of language in the expression of emotions. *Metaphor and Symbolic Activity*, 2, 1987, 239-250.

Fehr, B. & Russell, J. A., The concept of love: Viewed from a prototype perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 1991, 425-438.

Hoffman, R. R., Waggoner, J.E. & Palermo, D. S., Metaphor and context in the language and emotion. In R. R. Hoffman & D. S. Palermo (Eds.), *Cognition and the symbolic processes : Applied and ecological perspectives*. Lawrence Erlbaum Associates, 1991.

星野命「身体語彙による表現」『日本語の語彙と表現』（日本語講座4）大修館書店′一九七六。

Johnson, M., *The body in the mind : The bodies basis of meaning, Imagination and reasons*. University of Chicago Press, 1987.〔菅野盾樹他訳『心の中の身体』紀伊國屋書店′一九九二〕。

Kövecses, Z., *Emotion concepts*. Springer-Verlag, 1990.

楠見孝「共感覚に基づく形容表現の理解過程について——感覚形容語の通様相的修飾」『心理学研究』五八′一九八八a′三七三-三八〇頁。

楠見孝「共感覚的メタファの心理-語彙論的分析」『記号学研究』八′一九八八b′二三七-二四八頁。

楠見孝「比喩の生成・理解と意味構造」稲田俊司編『認知科学のフロンティアII』サイエンス社′一九九二。

楠見孝「感情のイメージスキーマ・モデル——比喩表現を支える概念構造」『第一〇回日本認知科学会大会発表論文集』一九九三′五八-五九頁。

楠見孝「大学生のもつ愛の文化的モデル——メタファ生成法と概念地図法による検討」『日本発達心理学会第五回大会発表論文集』一九九四′二七六頁。

楠見孝「青年期の認知発達と知識獲得」落合良行′楠見孝編『自己への問い直し——青年期』（講座生涯発達心理学4）金子書房′一九九五。

Lakoff, G. & Johnson, M., *Metaphor we live by*. University Chicago Press 1980.〔渡部昇一他訳『レトリックと人生』大修館書店′一九八六〕。

Lakoff, G., *Women, fire, and dangerous things : What categories reveal about the mind*. University of Chicago Press, 1987.〔池上嘉彦他訳『認知意味論』紀伊國屋書店′一九九三〕。

Lakoff, G. & Kövecses, Z., The cognitive model of anger inherent in American English. In D. Holland & N. Quinn (Eds.), *Cultural models in language and thought*. Cambridge University Press, 1987.

中村明「慣用句と比喩表現」『日本語学』四′一九八五′二八-三六頁。

中村真「文脈のなかの表情」吉川左紀子′益谷真′中村真編『顔と心——顔の心理学入門』サイエンス社′一九九三。

宮地裕『慣用句の意味と用法』明治書院′一九八二。

岡原昌幸「感情経験の社会学的理解」『社会学評論』三八′一九八七′三二一-三三五頁。

Russell, J. A., Culture and the categorization of emotions. *Psychological Bulletin*, 110, 1991, 426-450.

Shaver, P., Schwartz, D. K., Krison, D. & O'Connor, C., Emotion knowledge: Further explanation of a prototype approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1987, 1061-1086.

下川昭夫′佐々木めぐみ「感情の種類と構造に関する考察（1）」『日本心理学会第五四回大会発表論文集』一九九〇′五七四頁。

下川昭夫′川野健治′平野直己「感情研究レビュー②——感情の構造について」『東京都立大学心理学研究』二′一九九二′二一-三〇頁。

Simon, R. W., Eder, D. & Evans, C., The development of feeling norms underlying romantic love among adolescent females. *Social Psychology Quarterly*, 55, 1992, 29-46.

Strauss, C. & Quinn, N., Preliminaries to a theory of culture acquisition. In Pick, H. L. Jr., Broek, P. V. D. & Knill, D. C. (Eds.), *Cognition : conceptual and methodological issues*. American Psychological Association, 1991.

Watson, D., Clark, L. A. & Tellegen, A., Cross-cultural convergence in the structure of mood: A Japanese replication and a comparison with U. S. findings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1984, 127-144.

山内弘継「言語手がかりによる感情・情緒の心理的測定の試み」『心理学研究』四九′一九七八′二八四-二八七頁。

Yamada, H., Visual information for categorizing facial expression of emotions. *Applied Cognitive Psychology*, 7, 1993, 257-270.

吉田正昭「情緒の情報処理機制」浜治世編『動機・情緒・人格』（現代基礎心理学8）東京大学出版会′一九八一。

第3章

Arnold, M. B., *Emotion and personality*. (Vol. 1 & 2). Columbia University Press, 1960.

Ekman, P. & Friesen, W. V., *Unmasking the face : A guide to recognizing emotion from facial clues*. Prentice-Hall, 1975.